

地先定着魚の蓄養技術開発

～3種類のメバルについて～

メバルは瀬戸内海をはじめ、日本近海に広く分布し、広島近郊の瀬戸内海では「ほんめばる」と呼ばれる身近な魚種です。また漁業や釣りの対象として非常に人気のある魚です。

このメバルは釣り人の間では古くよりクロ、キン、アカ、アオ・等といったように主に体色によって多種多様に呼称されてきましたが、本来は単一種「メバル *Sebastes inermis*」であると長年されてきました。

ところがこのメバルが実際には3種存在することが、甲斐・中坊（2008）によって発表されました。この論文の中でこれまでメバルとされていた種はアカメバル (*S. inermis*)、クロメバル (*S. ventricosus*) およびシロメバル (*S. cheni*) の3種に新たに分類されています（写真1）。分類された3種は種間で各鱗の棘条や軟条の数や胸鱗の長さなどの他に、遺伝的にも異なると報告されていますが、比較的手軽に分類に使えるのは胸鱗の軟条数で、アカメバルで15本、クロメバルで16本、シロメバルで17本の軟条を持ちます。しかし、飼育するために魚を生かした状態では、鱗の軟条を計数するのは難しいため、当センターではより簡易で迅速な判別法を検討しました。その結果、クロメバルは他の2種より体サイズに比べて目の直径が小さく、軟条数を計数しなくても目の大きさを見るだけで種の判別が出来ることを見出しました（写真2）。

前出の論文によると、3種は東北または北海道から九州まで広く共存しているものの、生息環境が種間で若干異なる様です。当センターが試験用に購入した能美島周辺の定置網で漁獲されたメバル類の種組成を見ると、アカメバルが64%、次いでクロメバルが34%、シロメバルが2%という結果となりました。分布についての詳しいことはまだ分かっていないようですが、3種のメバル類がどのように分布しているのかは大変興味深いところです。

当センターでは現在定置網で漁獲されたメバル類のうちアカメバルとクロメバルを飼育していますが、種間で行動などの生態や配合餌料への餌付きやすさ等が異なることが分かってきました。これらの差がどの程度成長に反映されるの

かを継続飼育で確認中です。

当センターでは「地付き魚の蓄養技術の高度化と効率的な活魚輸送技術の開発」に取り組んでいます。この中で、メバル類の蓄養技術については、アカメバルとクロメバルの生残性、成長性や飼いやすさなどの違いを明らかにし、生産者に普及できる蓄養技術の確立を目指して研究を進めています。



写真1 広島湾産のメバル類3種
（上からシロメバル、クロメバル、アカメバル）



写真2 アカメバル（上）とクロメバル（下）の識別
（眼の大きさの違いに注目！）